

望ましい小・中学校間の連携のあり方

平成19年度

仙台市小学校長会 生徒指導部

I はじめに

近年、『中1ギャップ』という学習や生活の変化になじめない生徒の話題がよく出てくるようになった。実際にどのようなケースがあり、またどんな要因から発生するのかを明らかにしたいと考える。その解決に向けては小・中の連携が必要であると考えているが、どのような連携が効果的なのかを検討することを通して校長の役割を考えてみたい。

昨年度は『小1プロブレム』・『中1ギャップ』について、小学校長に自校の実態を尋ねてみた（進学先の中学校からの情報）が、今年度は、『中1ギャップ』に焦点を絞り、中学校の校長に自校の実態を教えていただき、そこから小・中連携について考えてみることにした。

中1ギャップ

小学生から中学1年生になったとたん、学習や生活の変化になじめずに不登校になったり、いじめが急増したりするという現象。（新潟県教育委員会教育月報より）

II 前年度の調査から見たこと

現状と課題

- ◎ 4割の小学校から
 - ・ 欠席しがちな生徒や保健室登校がある。
 - ・ 騒ぐ、教室内を歩き回る、おしゃべりする、授業を無視する生徒がいる。
- ◎ 実際にはもっと多いのではないか。
- ◎ 小学校では、その対応策として話し合いや情報交換を行っているが、中学校のことでもあり、なかなか対応できない状態である。
- ◎ 中学校との交流は9割の小学校で行われている。
 - ・ 引継や行事の調整が主
 - ・ 『中1ギャップ』の話し合いはほとんど行われていない
- ◎ 連携がスムーズに進んでいない

考 察

- ◎ 要因
 - ・ 小学校と中学校とで学習の仕方が違う（教科担任制）
 - ・ 生活の仕方が違う
 - ・ 家庭や生徒の問題
 - ・ 校内体制の違いや不備
 - ・ 教員の指導力不足

- ◎ 『中1ギャップ』を防止するための校長の主な役割
- ・ 小・中連携へのリーダーシップを発揮する。
 - ・ 教職員の指導体制を整備する。
 - ・ 『中1ギャップ』についての研修を実施し、教職員の力量を高める。
 - ・ 高学年における教科担任制・一部専科制を行う。
 - ・ 基礎学力の確実な定着を図りながら、たくましい児童を育成する。
 - ・ 関係機関との連携。
 - ・ 児童に対して中学校生活の動機付けを行う。(中学校行事の見学、中学生との交流、卒業生による中学校生活の説明等)

Ⅲ 研究のねらい

中学校長に自校の『中1ギャップ』について尋ね、現状を把握するとともに、昨年度に行った小学校長対象の調査結果と比較し、望ましい小・中連携のあり方を検討し、校長の役割を探る。

また、その結果を仙台市小学校長会と仙台市中学校長会に提供する。

Ⅳ 研究方法

- | | |
|--------|---------------------------------|
| 1 調査対象 | 仙台市立中学校長（63校） |
| 2 調査期間 | 平成19年 9月 3日 ～ 平成19年 9月28日 |
| 3 調査方法 | 質問紙法 |
| 4 調査内容 | 『中1ギャップ』の実態とその対応策や課題、小・中連携に係る内容 |

Ⅴ アンケート調査の概要

回答数 63校（回収率100パーセント）

大規模校（19学級以上）	4校
中規模校（12～18学級）	29校
小規模校（11学級まで）	30校

学区内小学校数	1校	11校
	2校	24校
	3校以上	28校

- 1 『中1ギャップ』に該当するような問題行動をとった生徒がいるか
- | | | |
|---|-------|-----|
| ア | いる | 24校 |
| イ | いない | 25校 |
| ウ | 判断に迷う | 14校 |

- 2-① 1で ア・ウと回答した学校の規模別

大規模校（19学級以上）	3	75%
中規模校（12～18学級）	18	62%
小規模校（11学級まで）	17	57%

2-② 1で ア・ウと回答した学校の小学校数

ア（1校）	4	36%
イ（2校）	15	63%
ウ（3校以上）	19	68%

2-③ 1で アと回答した学校の問題行動種別

a（騒ぐ）	6	b（教室内を歩き回る）	3
c（教室から抜け出す）	1	d（あたりちらす）	2
e（授業を無視する）	4	f（友達とおしゃべりする）	8
g（保健室・相談室登校）	7	h（欠席しがち）	19
i（その他）	4		

けんか 遅刻がち 授業中のトイレ いじめ

2-④ 1で アと回答した学校の対応

a（特に何もしない。通常の教科指導あるいは生徒指導）	4
b（小学校に情報を提供し、小中連絡会を開催する）	11
c（小中の交流授業を行っている）	1
d（クラブ見学会や行事への招待を行っている）	10
e（その他）	10

- ・ 保護者と連携しながら、別室登校で対応している。
- ・ 学年会で情報交換し、情報を共有し、統一した指導を行う。
- ・ 生徒個々への相談を行う。
- ・ 本人・親への連絡と家庭訪問
- ・ 情報交換会を数回開催した。
- ・ 校内的には複数担任制にした。

2-⑤ 対応で課題となること

- ・ 情報交換の精度に関すること
- ・ 日程の調整
- ・ 保護者への対応のあり方
- ・ その他

LDやADHDとの区別

小学校での適切な指導

担任の負担が大きい

2-⑥ 中学校が考える『中1ギャップ』の要因（全63校）

a (小学校と中学校の学習や生活の違い)	4 3
b (小学校の学級担任制と中学校の教科担任制の違い)	2 5
c (小学校教員の指導力不足)	6
d (中学校教員の指導力不足)	2
e (小学校の校内体制の不備)	3
f (中学校の校内体制の不備)	3
g (家庭の問題)	2 7
h (生徒の問題－他者とのコミュニケーション力の不足, 忍耐力の不足等)	2 8
i (その他)	1 3
・ 地域の異年齢の子ども達の交流(遊び)が減少したこと	
・ 集団の中での人間関係作りの経験が不足している。	
・ 家庭への中学校生活についての説明不足	
・ 小中の連携不足・情報交換不足(特に生徒指導面)(複数)	
・ 小規模校から大規模校へ	
・ 複合的(保護者の指導力不足, しつけ不足の状態に加え, 小学校・中学校教員の指導力などが加わって, 結果として『中1ギャップ』が起こっている)	
・ 複数の学校からの入学による人間関係の変化が大きい。人間関係の変化に着目すべき。	
・ 小学校卒業後, 制度の違いや複数小学校の合体等による環境の大きな変化, さらに, 学習に対する不慣れ等も影響しているのではないか。	
・ 家庭の養育環境, 家庭教育など幼児期や小学校低学年での親や周囲の過保護, 過干渉などが原因で, 自立心, 社会性, 忍耐力などの精神的な向上と安定が育たずに, 節目の年頃にギャップとして表面化してくるのではないか。	

3-① 1で イと回答した学校の規模別

大規模校(19学級以上)	1	2 5 %
中規模校(12～18学級)	1 1	3 8 %
小規模校(11学級まで)	1 3	4 3 %

3-② 1で イと回答した学校の小学校数

ア(1校)	7	6 4 %
イ(2校)	9	3 7 %
ウ(3校以上)	9	3 2 %

3-③ 1で イと回答した学校が『中1ギャップ』を防止するために取り組んでいること

a (校内体制の整備)	2 1
b (教員研修－『中1ギャップ』についての研修)	4
c (小学校との連携)	1 7
d (補助教員等の要請)	2

- | | |
|--------------|---|
| e (関係機関との協力) | 4 |
| f (その他) | 2 |
- 4 小学校との交流の機会があるか
- | | | | |
|--------|-----|--------|---|
| ア (ある) | 6 3 | イ (ない) | 0 |
|--------|-----|--------|---|
- 5 4でアと回答した学校の具体的交流内容
- | | |
|------------------------|-----|
| a (小学校の見学) | 1 4 |
| b (中学校の行事への招待) | 2 1 |
| c (中学校での体験学習) | 1 4 |
| d (中学校の教員による授業を小学校で行う) | 1 0 |
| e (小学校行事・授業の参観) | 3 1 |
| f (話し合い) | 6 3 |
| g (その他) | 2 4 |
- 小学生と中学生が一緒に活動する。
- 6 5でfと回答した学校の話し合いの内容
- | | |
|---------------------|-----|
| a (生徒のこと) | 5 6 |
| b (行事のすりあわせ) | 2 9 |
| c (『中1ギャップ』の解消について) | 7 |
| d (その他) | 6 |
- ・ ADHD LD等の生徒についての情報交換や授業参観
 - ・ 小中学校ともに成績関係,特に一斉学力調査結果などをそのまま持ち寄り,学力の小中の継続性に配慮しながら学力向上を目指している。
- 7 小学校との交流の成果
- 8 小・中連携を進める上での課題
- 9 『中1ギャップ』を防止するために小学校長に期待すること
-
- VI 調査からわかること参照

VI 調査からわかること

- 1 『中1ギャップ』は仙台市内63中学校の約60%で見られる。
- 2 中学校区内の小学校の数が多くなるに連れて、また、学校規模が大きくなるに連れて『中1ギャップ』の出現率が高まる。
- 3 『中1ギャップ』の態様は大きく次の二つに分類できる。
 - (1) 遅刻・保健室登校・欠席がち・不登校というグループ
 - (2) おしゃべり・授業無視・騒ぐ・歩き回る・抜け出しという、授業への不適応というグループ
- 4 『中1ギャップ』が起きる要因としては次の3つに分類できる。
 - (1) 小学校と中学校のシステムの違いによるとまどいから起きる

- (2) 生徒の個人の問題から起きる
- (3) ADHDやLDといった一次障害を原因として起きる
- 5 また、『中1ギャップ』が起きる要因を複合的と捉える次のような意見がある。
 - (1) 保護者の指導力不足、しつけ不足の状態に加え、小学校・中学校教員の指導力の問題などが加わって、結果として『中1ギャップ』が起きている。
 - (2) 小学校卒業後、制度の違いや複数小学校の合体等による環境の大きな変化、さらには、学習に対する不慣れ等も影響しているのではないか。
 - (3) 家庭の養育環境、家庭教育など幼児期や小学校低学年での親や周囲の過保護、過干渉などが原因で、自立心、社会性、忍耐力などの精神的な向上と安定が育たずに、節目の年頃にギャップとして表面化してくるのではないか。
- 6 『中1ギャップ』への対応として、各中学校は小学校と連携して情報交換を行い指導に活かしている。また、予防的措置として、中学校の学習や生活について、6年児童、小学校教員、保護者に知らせる対応（出前授業、授業参観、部活見学会など）を行っている。
- 7 『中1ギャップ』への対応で課題となっていることとして
 - (1) 中学校の学習や生活について、6年児童、小学校教員、保護者に知らせる対応（出前授業、授業参観、部活見学会など）を行うにあたって、日程調整に苦慮している。
 - (2) 情報交換について、学校規模が大きいほど、また、出身小学校の数が多いほど難しさを感じている。（質的にも量的にも）
 - (3) 保護者の中学校教育への理解と協力が十分でないと、連携がうまく進まない。
- 8 『中1ギャップ』がないという中学校が『中1ギャップ』を防止するために取り組んでいることとして、小学生を受け入れる段階で、小学校からの情報をもとに校内の体制を整備すると共に、研修をするなどして、受け入れ態勢を整えている。
- 9 市内すべての中学校は何らかの形で小学校と交流している。具体的な交流内容は
 - (1) 小中教員同士が話し合う。
 - (2) 中学校教員が小学生を見る、指導する。
 - (3) 小学生が中学校の行事、授業を見る。
 - (4) 小学生と中学生と一緒に活動する。
- 10 小中間の話し合いの内容は
 - (1) 入学してくる児童についての情報交換をしている。その際テーマ（『中1ギャップ』の解消、学力向上等）を決めて話し合っている中学校もある。
 - (2) 行事のすりあわせ。
- 11 小学校との交流の成果
 - (1) 児童にとって
 - ・ 中学校の学習や生活について知る機会となり、中学校をより身近なものに捉えられる。（不安解消、スムーズなスタート、準備ができる等）
 - (2) 中学校にとって（職員・体制）
 - ・ 問題行動等に小中一貫性のある指導が可能になる。
 - ・ 情報をもとに、より個に配慮した指導が可能になる。また、小学校教員の指導

を見ることで、それを活かした指導が可能になる。

- ・ 情報をもとにした学級編制をすることができる。

(3) 小学校教員にとって

- ・ 中学校の指導を見ることで、小学校段階で中学校につながる生徒指導や教科指導を行うことができる。

(4) 小・中学校の連携について

- ・ 児童の中学校入学後の連携体制がとりやすい。

(5) その他

- ・ 小学生と中学生の合同の活動は中学生にとっても楽しいものになっている。

12 小・中連携を進める上での課題

(1) 小中いずれも、話し合いをする時間の確保が難しい。

(2) 情報の精度が低い。(個人情報への壁、担任一人だけという視点、問題行動の芽は中学年からある、引継ファイルの作成)

(3) 小は中を、中は小を、教員がお互いの学校について理解が不十分である。そのために、生徒指導等に対して温度差がある。互いに授業を参観したり、交換授業をしたりすることも方策である。

(4) 連携に消極的な小学校がある。連携の目標を共有化し、連携内容を焦点化して取り組む必要がある。

13 中1ギャップを防止するために小学校長に期待すること

(1) 小学校での指導に期待すること

- ・ 読み書き計算などの基礎的基本的学力を身につけさせる。
- ・ 基本的な生活習慣の確立を。(話を聞く、規則を守る)
- ・ コミュニケーション能力を高める指導を。
- ・ よりよい人間関係作りを。
- ・ 横並び教育だけでなく、リーダー養成も。
- ・ いじめ構造を持たない学級作り。
- ・ 学級崩壊を起こさない。
- ・ 特別支援教育の充実を。
- ・ 高学年で一部教科担任制を。
- ・ 豊かな体験活動を。
- ・ たくましい児童を育ててほしい。

(2) 引継内容の精度を高めること

- ・ 正確な情報を。
- ・ 入学予定児童で問題行動等を抱える児童については早めに情報を中学校へ。
- ・ 引継の精度を高めるために、複数の教師で児童の特徴を把握してほしい。
- ・ 6年時の情報だけでなく、6年間の情報の引継を。(特に、長期欠席やいじめの加害者、被害者等の情報)
- ・ 指導上配慮を要する児童は把握できるが、予備軍(欠席が少し多い、他の児童との交流が不得手)の情報を。
- ・ 保護者の情報もほしい。

(3) 具体的な交流の推進

- ・ 教員同士の交流（授業研究会，生徒指導情報交換会，教職員レク）
- ・ 出前授業
- ・ 児童生徒の交流（中学校行事へ招待，陸上練習会，合同演奏会，地域行事への参加等）
- ・ 中学生による小学生への中学校生活紹介
- ・ 不登校傾向児童等を，保護者の了解のもと，入学前に保護者共々中学校のＳＣや生徒指導担当と面談させる。

(4) 教職員の意識を高める

- ・ 義務教育９年間の中で子どもを育てていくという意識を持ち，小・中それぞれが共通した生徒指導観や目標を持ち，実際の指導をしていくことが重要である。

Ⅶ おわりに

今回の調査では，仙台市内の中学校では『中１ギャップ』の態様として，大きく二つに分類できることがわかった。

(1) 遅刻・保健室等別室登校・欠席がち・不登校というグループ

(2) おしゃべり・授業無視・騒ぐ・歩き回る・抜け出しという，授業への不適応というグループ

『中１ギャップ』が起きている中学校から，そのような態様が起きる原因として，小学校時代からあった『中１ギャップ』の芽が，小学校とのシステムの違い（教科担任制，新しい生徒間人間関係，部活動等）が水や肥料となり，『中１ギャップ』として顕在化しているのではないかと報告されている。また，未然に防げたかもしれないことが，時間確保の面や情報の精度の点で，小・中連絡会（引継）が十分機能していないことで，顕在化している場合もある，と指摘している。

一方，『中１ギャップ』が見られない中学校からは，小学校からの情報をもとに校内体制を整備すると共に，必要な研修を行うなどして受け入れ態勢を整えている，と報告されている。また，具体的に連携・交流を行ったことで，大きな成果が得られ，小学生が安心して中学校へ進学することができ，落ち着いた中学校生活を送っているという調査結果も得られている。

Ⅷ 提言

以上の調査結果をもとに，仙台市小学校長会生徒指導部会は，仙台市小学校長会と仙台市中学校長会に，『中１ギャップ』を可能な限り防止し，その解決を図るために，次のことを提言させていただきます。

- 1 児童生徒を義務教育９年間のスパンに立って育てていくという認識を，自校教員に対して持たせる。
- 2 引継について
 - (1) 年度末の引継だけでなく，こまめな情報交換を行う。そのために，互いに授業や行事を参観し，行き来しやすく，話し合いやすい雰囲気を醸成しておく。

(2) 引継内容の精度を高めるために、6年時の実態だけでなく、中学年あたりから様子についても押さえておく。

(3) 指導上配慮を要する児童の情報だけでなく、予備軍（欠席が少し多い、他の児童との交流が不得手など）の情報も引き継ぐ。

3 小学校の指導においては

(1) 教科の基礎基本について指導をしっかり行い、確かな学力を身につけさせる。

(2) 基本的な生活・学習習慣を身につけさせる。

(3) 高学年においては、可能な範囲で、中学校での学習を意識した学習形態を取り入れる。

(4) 生徒指導上の問題を解決しておく。

4 中学校においては

(1) 引継や各種情報交換を通して得られた資料を基に、校内の体制を整備する。

(2) 『中1ギャップ』は起こりうるものとして、事前に研修を行うなどして、対応策を考えておく。

5 次のような例を参考に、具体的に交流に取り組む

(1) 小学校教員が、中学校の教科指導や行事の実際を見る。

(2) 中学校教員が、小学校の学習指導や行事の実際を見る。

(3) 中学校教員が、小学生に授業を行う。（出前授業・体験入学時）

(4) 小学生が中学校の部活動や大きな行事（運動会、文化祭など）を見る。

(5) 中学生が、出身小学校に出向き、小学生に中学校生活について説明する。

(6) 小中学生が一緒に活動する。

- ・ 陸上練習会（競技種目練習・応援練習）
- ・ 合同演奏会（含む練習会）
- ・ 合同地域清掃など

参 考

この調査をまとめるに当たって、仙台市教育委員会学事課，教育指導課，教育相談課に問い合わせを行い，学校規模や『中1ギャップ』の定義について確認を行いました。また，『みやぎ県政だより』平成19年5月1日号“『中1ギャップ』の解消を目指して”（宮城県教育委員会義務教育課発信）も参考にしました。